



①幸橋(さいわいはし) 平成15年竣工
最初に出会った記念すべき橋、幸橋。長さより幅の方が広く、不思議な感じの橋だった。「松江の玄関」というような趣も感じられた。しかし「近代的で情緒がない」「橋らしくない」という感想も。

松江の橋

～今と昔をつなぐ～

原田美恵子

城下町松江には橋がたくさんある。水の都と呼ばれるように、川や穴道湖など、水を身近に感じることができる町である。張り巡らされた堀や水路にかけられた橋は600ほどもあるそうだ。そんな松江の橋、特に松江城を囲む堀川にかかる橋をこの目でじっくり観察しようと、8月某日、夏真っ盛りの暑い日に私たち5人の編集部員は県庁前に集まった。



②京橋(きょうはし) 平成8年竣工
柳のたくさん植わっている道を東へ進むと京橋がある。「洋風で気に入った」「ハイカラなデザインがきれい。明治っぽい」とみんなに好評だった。「50年くらい後に歴史を感じさせる橋になりそうだ」という感想も。



③東京橋(ひがしきょうはし) 昭和44年竣工
カラコロ広場を過ぎ東京橋へ。「とうきょうばし」と読んでしまいそうになるが、「ひがしきょうはし」と読むことにみんな驚いていた。扇形の変な形の橋だが、「古くて京橋よりこっちの方がいい」という人も。



④新栄橋(しんさかえばし)
栄橋を過ぎ、新栄橋にたどり着いた。すぐ近くに甲部橋があり、橋の交差点のようだった。「適当な感じの橋」「予算をかけてなさそう」という感想が多かったが、堀川に出っ張りがあって、そこから橋がかけられていて「趣がある」という人もいた。



⑤鍛冶橋(かじはし) 昭和7年竣工
頑丈そうな鍛冶橋。両側の道路がずれているために、道路に対して斜めに橋がかかっている。欄干には車がぶつかった跡も見られた。斜めってことが分からなくて、まっすぐ進んでぶつかったのだろうか。

⑦米子橋(よなごばし)
遊覧船から見ると、とても趣があるように見える米子橋。実際に歩いてみると、何の変哲もない橋で、片方だけに遊覧船用の飾りがついているというものだった。普段は注意して見ない橋の意外な一面を垣間見ることができた。



⑥新米子橋(しんよなごばし) 平成3年竣工
さらに東へ進んで扇橋を見た後、引き返して甲部橋から北へ進み、新米子橋に着く。人しか渡れない小さな橋で、「レトロでかわいい」と好評。木で造ってあるように見えたが、実はコンクリート。意外と新しい橋だった。





⑮鶺鴒部屋橋 (うべやばし)

遊覧船に乗ると、くぐるのが一番たいへんな鶺鴒部屋橋。天井は低く、幅も遊覧船が通るのにギリギリ。橋の上は普通の道路って感じで、歩いていると橋だということが分かりにくい。堀川遊覧の楽しみの一つである。



最後に遊覧船に乗り解散となった。遊覧船から見ると、歩いてまわった橋のどれもが少し違って見えて新鮮だった。私たちが見た橋はほんの一部。ほかにも橋はたくさんある。普段あまり注目されない橋だが、たまには気に留めてみると新しい発見があるかもしれない。

⑭千鳥橋 (ちどりばし)

平成6年竣工
県庁の窓から覗く「しまねっこ」を横目に千鳥橋にたどり着いた。この橋は江戸時代には「御廊下橋」と呼ばれ、松江城の中心と三之丸御殿を結ぶ、重要な橋だったとか。現在は無いが、屋根がかかっていたという。まるくてやさしさがある、歩きやすそうな橋だった。



⑬亀田橋 (かめだばし) 昭和51年竣工
萌音という団子屋さんで元気を回復し、亀田橋へやってきた。木製で、歴史を感じさせる橋だった。欄干の下の方から木が生えていて、みんな驚いていた。



⑫新橋 (しんはし)

平成13年竣工
稲荷橋を渡って城山を出ると、すぐの所に新橋。歩道部分と車道部分の高さがずいぶん違って、しかも趣まで違う。時代の違う橋が二つあったという感じ。「段差が面白い」「情緒がある」とみんなにも人気だった。この辺りまで来ると、暑さと疲労で足取りが重くなってきていた。

⑪北惣門橋 (きたそうもんばし)

平成6年竣工
明治時代に石造りになった北惣門橋だが、平成になって史跡にふさわしい江戸時代の木橋へとつくり変えられたそう。車も通れるようになっていて、木がいい感じが古びていると好評だった。



⑩宇賀橋 (うがはし)

昭和48年竣工
この橋は古くて趣があり、木の様子がまさに城下町という感じだった。欄干が凝っていて、「今までの橋で一番景観に合っている」という人も。松江城に近くにつれて、景観を考慮した橋が多く見られた。



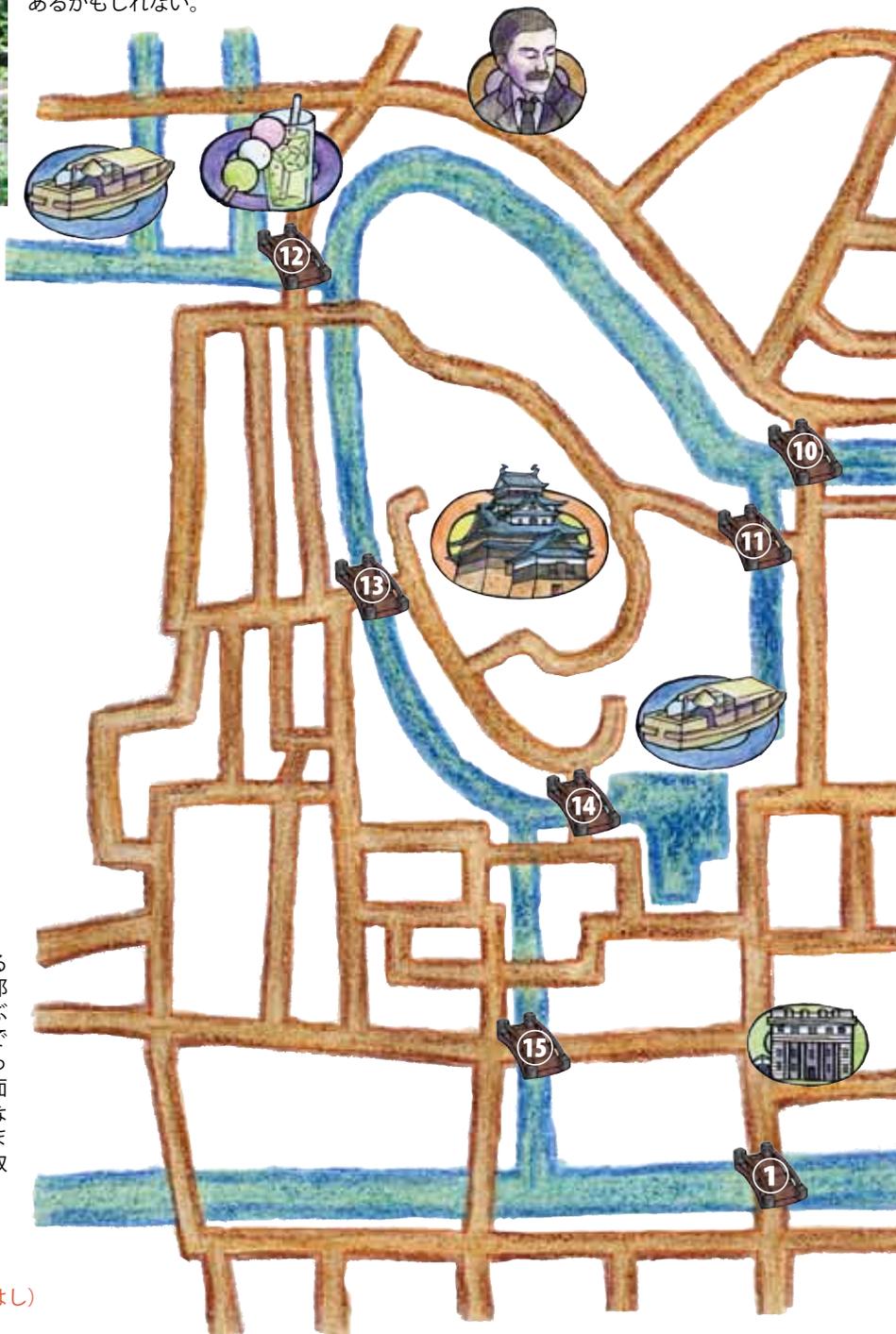
⑨北堀橋 (きたほりばし)

昭和39年竣工
この橋は今までの橋とは形が違って、また、欄干に擬宝珠がついていたが、橋の建造とは別に後からつけられたような感じだった。



⑧普門院橋 (ふもんいんはし)

平成2年竣工
米子橋の次は普門院橋。小泉八雲が最初に書いた怪談、「小豆磨ぎ橋」に出てくる普門院。昔の雰囲気をかもしだして、夜に来ると怖そうという印象だった。





■ル・アーブル駅に到着。

自分のルーツはノルマン？

一昨年の秋、アメリカはノースカロライナに住むレイ・ハーン (Ray Hearne) という年輩の女性が私を訪ね、数十頁のコピーの束を手渡して行った。それは『ハーン家の歴史 (Hearne History)』という本の一部で、「ハーン」という姓の綴りは Harun, Heiron, Heron, Hearn, Hearne, Heaton, Herron の七種類がみられるが、そのルーツはすべてノルマン人に行きつくと言われていた。

ノルマンディー 小旅行

——ルーツをもとめて——

小泉 凡

ノルマン人はもともとスカンジナビア半島やデンマーク地方を拠点とする狩猟・漁労民で、八世紀頃からバイキングとして各地の海岸地帯を攻略し、十世紀はじめには北フランスにノルマンディー公国を建てた。レイ・ハーンさんも最近、北仏ルーアンに旅をしてこの資料を手に入れたという。以来、ラフカディオ・ハーン

ンという作家に、姓の綴りは違うものの、特別な親近感を覚えて、来日の機会に松江を訪ねたというわけだ。

私自身は、自分のルーツに関して、とくに千年も前の先祖のことにはさして関心はなかった。でも少し気がかりなことがある。初期のハーンの伝記には概して父方の先祖はイングランドの北部ノーザン



■旅の同行者タクシ・エフスタシウ氏。

ンバランド州の田舎町の城主でその子孫がアイルランドに渡ったとしているが、最近では、ハーン家の先祖はアイルランド土着のケルト系だと考える説が有力になつてきて、ともするとこれで決着しそうな気配さえある。

しかし、完全な証拠がないままにどちらか一方に固定することは避けた。ルーツ探究の夢は後世に残しておいた方が楽しい。実際、レイさんからもつたコピーには、ハーン家(フランス語ではヘロン家と呼ぶ)は北仏ノルマンディー地方にいたが、一〇六六年イングランド王エドワードの死去に際し、ノルマンディー公ウィリアムが王位を要求して侵入したいいわゆるノルマン・コクエスタの際に、ウィリアムにつき従って渡英した。その子孫のウィリアム・ヘロンがノーザン



■シャルル・ドゴール空港。案内板がパリにきた実感を与える。

ンブランドのバンボロー城の城主になつたと書かれている。

これが事実だとすれば、ラフカディオ・ハーンが通っていた聖カスバート校はノーザンブランドのすぐ南のダーラムにあり、またフランスで留学した可能性があるとわかってきたイヴトリーの神学校は、ハーン家のまさにルーツの場所ノルマンディー地方にある。もしかすると、ラフカディオを育んだ大叔母サラがそのルーツのことを理解していて、ノルマンディーと北イングランドの学校にハーンを留学させたという推測が許されるかもしれない。

そんな想像をしているうちに、根っからの放浪癖が顔を出し、だんだんに足がつかなくなってきた。遠い先祖の足跡を訪ねたいという思いから、ほとんど下調べをする暇もないままに、今年の五月連休のはじまりの日に、弾丸旅行に出發した。

パリからルーアンへ

パリのシャルル・ドゴール空港に着い

たのは、四月三十日の早朝。ここでギリシャ人の友人タキス・エフスタシウが到着するのを待つ。彼はここ数年、ハーンの足跡を旅することに関心をもち、松江にも何度も足を運んでいる。恐るべきコミュニケーション能力の持ち主で、たいいてい、初対面の人でも、ものの二、三分で旧知のような関係をつくってしまう。反面、地図や時刻表を読むのがめっっぽう苦手で、ひとり旅はまずしない。私と正反対だ。

それぞれの得意分野を生かして旅の役割分担を決め、まずは私のリードでパリ・サン・ラザール駅をめざす。彼は空港にいたカナダ人やスウェーデン人にさっそく話しかけ、「この男の後をついていけ



■ルーアン駅で。フィリップ・ブルネット氏との出会い。



■ルーアンのシンボル、ノートルダム大聖堂。

ば間違いない」などと余計なことを言うが、パリ市内に電車で入るのは意外と難しいので、内心ドキドキしている。RE Rという郊外に向かう鉄道とメトロ口が複雑に入り組んでいるからだ。パリ北駅まではRE Rで乗り換えなしに行けるが、そこで下車してマジヤンタ駅まで歩き、東方面から来るRE Rに乗り換え、サン・ラザール駅に行かなければならない。

何とか無事到着。ここから十二時五十分発のルーアン行きの中距離通勤電車の二階席に座り、しばし安心してセーヌ河畔の過ぎゆく風景を楽しむ。印象派の画家たちが好んで訪れたノルマンディーへの道は、穏やかな光に包まれて実に牧歌的な風景だった。

午後二時にルーアンに着。天気は予報ほど悪くない

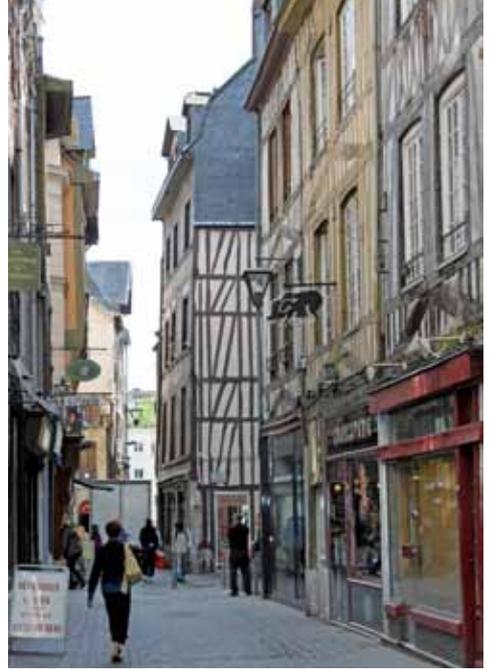
がパリに比べて一段と肌寒さを感じる。駅でもう一人の知人が合流する。彼はフィリップ・ブルネットというルーアン大学の教授でアフリカの民族音楽と古代ギリシャ芸術を専門としている。この旅の直前にタキスの友人のギリシャ人作家バビス・プレイタキスさんが自分の学生時代の親友だといって紹介してくれた人だ。楽器を持って現れたので初対面だがすぐにわかった。

中心街ヴェュー・マルシェ近くにあるホテルに徒歩で向かい、チェックインを済ませて町にでる。ホテルのすぐ前には、救国の少女ジャンヌ・ダルクが一四三一年五月三十日に魔女として断罪され、十九歳の若さで火刑に処せられた処刑場跡があった。ノルマンディー地方独特の木骨組み切妻壁をもつハーフティンバー・スタイルの古風な建物が並ぶ町並みを散策し三人で遅い軽めの昼食。ワ



■(上) ノルマンディー名産の牡蠣。(右) ノルマンディーの地ビール。





■木骨組みの伝統的な建物が並ぶルーアンの市街地。

を褒め称え「僕たちのためにパンにチーズとパテをはさんでくれない。できればコーヒーも！」と頼んでい。何と、チーズ屋で朝ごはんを作ってもらおうという魂胆だ。しかし、彼が頼むと、おばあちゃんは微笑みながら、フランスパンにパテとチーズを挟んで、コーヒーまで入れてくれた。そして、松江でレイ

の指揮のもとに行われた兵員八万人によるノルマンディー上陸作戦だ。それによってフランスは解放されるが、この地方の多くの建物が米軍によって破壊されたことも悲しい歴史のひとつだ。ヘロン村については、昨夜、フィリップが友人に電話で場所を確認して地図をもらっておいでくれたので、これで何とか訪ねることができそう。そしてヘロン城があった場所が、今も「ヘロン村」と呼ばれていることもわかった。



■かつてヘロン城があった場所。

インとカマンベール・チーズやサラミ、そして牡蠣を楽しんだ。

カマンベールという白カビのチーズの名の由来は、ノルマンディー地方の地名から来ている。そのとろけるようなクリーミーな味わいには感動を覚える。しかし注文したワインはボルドー産で、地元製品ではない。ノルマンディーとその南西に位置するブルターニュ地方は、寒冷地でブドウの栽培に適さない。だから、地元ではシードルというリンゴからつくった発泡酒が親しまれている。そう、ノルマンディーは、フランスでありながら風土はイギリスのそれに近い。

旅の疲れから早寝をし、翌朝は青空から降り注ぐ朝日のまぶしさで目が覚める。朝食をとりタキスと町に出る。いかにも地元らしくチーズを山ほど積み上げている素朴な店に入ってみた。するとタキスはチーズ屋のおばあちゃん笑顔

のついでに十世紀に建てられたという「ヘロン城 (Chateau du Héron)」の写真を見せて聞いてみた。すると、「あつ、これ知ってる。一九四〇年過ぎまでここから四五キロほど離れたヘロン村 (Héron) にあったのよ」と、教えてくれた。そうか、でも、もう城はないのだ。

ヘロン村
すぐにタクシーをチャーターし、ヘロン村へ急いだ。道すがら、咲き乱れるコルザという菜種に似た黄色い花が、牧草地に彩を添えていた。小一時間で到着。牧草地の背後に森があり、美しいアンデル川が流れている。実に静かなところだ。村の入口にある看板に眼がとまった。「ようこそヘロン村へ (Bienvenue au Héron)」とあり、その上に鷺の絵が描かれている。



■(上段) アンデル川が流れるヘロン村の入り口。(下段)「ようこそヘロン村へ」。村の入り口にたつ看板。

フランス語で「ヘロン」は鷺を意味する。実はアイルランドのハーン家の家紋にも四羽の鷺が描かれており、それを知っていたハーンは松江で同僚の美術教師・後藤金弥に下げ羽の鷺を圖案化してもらい、後に小泉家の家紋とした。「鷺」の家紋を通じてこの村に急に親近感が湧いてきた。村人にたずねると、アンデル川には小魚が多く、それを狙って今でも鷺がいっぱいやってくる。だから「鷺(ヘロン)」という地名になったという。

家紋といえはこんな出来事がかつてあった。山下汽船に勤務していた私の父が、戦争中、軍用船で遠洋航海に出た際、世界でもっとも深いマリアナ海溝で撃沈され、海に投げ出された。ところがしばらくして日本の水雷艇が現れ、船首には何と「さぎ」という二字が読めた。「もしかすると、この船が……」と一筋の希望の光がさした。案の定、父は「さぎ」

に助けられ九死に一生を得て八四歳まで生きた。だから、「鷲」の家紋は我が家にとつては、単なる家の標ではなくお守りのような存在でもある。

かつて城があったという場所は、いまは牧草地となっていた。一番近くにあったお宅で聞いてみると、確かに米軍の攻撃を受けるまでそこに城があったとい、その資料も多少残っているらしいが、あいにく日曜とあつて、資料の管理者は留守だった。近くには、ルーアンに生まれたフランスの小説家ギュスターヴ・フロベール（一八二一—一八八〇）の小説「ボヴァリー夫人」（一八五六年）の舞台となったことを語る案内板が立てられていた。ハーンもフロベールの作品に親しみ、彼のゴーチエとボードレルの両者のすぐれた形式を結合する新形式を評価していたようだ。結局十分な情報を得ることができずに村をあとにした



■ハーンが通ったかもしれない神学校跡(イブトール)。

が、遠い先祖のルーツさがしに一筋の光がさしたような喜びを覚えた。

そこから六〇キロ余り北西に離れたイブトールという小さな町をめぐす。ここは、ハーンが子どもの頃、この町の神学校に留学したという説が一九一一年にケナードによつて出

されて以来、多くの研究者が訪ねた町だ。しかし、ハーンがこの町にいたという根拠はまだ何も見つかっていない。フロストがもしイブトールで学んだとすればここに違いないと推測した、アンステイテューション・エクレシヤティック(Institution Ecclesiastique)を訪ねるが、この建物も一九四〇年代の米軍の爆撃ですっかり建て替えられてしまつていた。そして、古い資料を簡単に得ることはできなかつた。

天気は一層不安定となり冷たい雨が大地を叩き始め、緑の香が強くなった。一段と強くなつてきた風に、なじみ深いアイルランドやイギリスの大気の感触を思い出した。半日近くお世話になつたタクシー・ドライバーのヤニックさんは実に親切な人で、取材を積極的に手伝つてくれた。一生懸命フランス語を英訳してくれたことに何より感謝している。イブトール駅でヤニックさんと別れ、インター



■(上段)夜のル・アーブル。(下段)パリ北駅とロンドンのセント・パンクラス駅を2時間余りで結ぶユーロスター。

シティで、イギリス海峡に臨む港町ル・アーブルに向かった。

ル・アーブル——旅の終わり

ル・アーブルはとりわけ第二次世界大戦での被害が甚大だった町で、ヨーロッパの町並みとは思えぬほど建物が新しい。大半が一九四五年から一九六四年にかけて再建されたものだ。まずはフェリー・ターミナルに向いてイギリスのポーツマス行きフェリーの時刻を調べ、切符売場や待合室は施設されているが、ぜひ明朝、イギリスへ渡りたいのだが、夕方に一本出るだけだと町の人たちが教えてくれた。しかし所要時間は五時間ほどだという。これならば、ノルマン人たちがイギリスにも国を作ろうとした気持ちからわからないではない。

最近、ハーンの渡米についてもこの港から船に乗ったという可能性がでてき

た。アメリカで乗船名簿が見つかったからだ。ロンドン発、ル・アーブル経由、ニューヨーク行きのセラ号という船で、ハーンは一八六九年九月二日にニューヨークに着いたことが明らかになった。そして、シンシナティで若きハーンに出会つたワトキンは、フランスの神学校の制服を着ていたと回想している。とすれば、イギリス留学後にイブトールかあるいはパリ等の神学校でフランス語を学び、ル・アーブルから船に乗つたという可能性も考えられる。

フェリー・ターミナルの脇にある漁船の船溜まりに、干潮で逃げ遅れたサメの赤ちゃんが横たわっている。妙に寂しげな夕暮れの光景だった。ここでは、地元ビールと魚を楽しんだ。やはり、「これはフランスではない」という実感を強くした。

翌朝、インターシティでパリへ戻る。足かけ三日間のノルマンディー弾丸旅行は、フランスらしからぬノルマンディーの風土を実感し、日本人には馴染みの薄いルーツ探しの旅の面白さを体感できた。このまま帰国しては余りにもつたない。そこでユーロスターに乗り換え、出発の一週間前に名乗り出てくれた初対面の親戚に会うためにロンドンに向かった。彼女はアニーという名で、先祖がハーンの父チャールズの兄弟だという。ここで紙幅が尽きたので続きは、別の機会に。(こいずみ・ぼん／総合文化学科教員*民俗学)

ジャジャンの楽しみ

ジャワの市場と 屋台の食

塩谷もも

ジャジャンとは

前号の『のんびり雲』では、インドネシア(ジャワ島)の断食月を取り上げ、「食べないこと」をテーマにした。今回はその逆で、「食べることをテーマに、ジャジャンを中心にジャワの市場と屋台について紹介してみたい。

ジャジャンとは、買い食い、あるいは菓子や軽食などを買って帰り、家で食べることを意味する語である。ジャワの人は、子どもからお年寄りにいたるまで、ジャジャンを好み、市場や屋台がその中心となる。ジャジャンは、人を結びつけるものでもある。私のジャワでのジャジャンの思い出も、食べ物だけでなく、



■ココナツジュースをジャジャンする子どもたち。

売り手の人や一緒に食べた人と深く結びついている。

ジャワでフィールドワークをしていたソロ市郊外の村からは、歩いて十五分くらいのところには市場があり、下宿していた家の家族は、そこで日々の食材を買っていた。この買物にとどき同行させてもらい、買物の仕方や内容を観察しながら、揚げ菓子、軽食等を買うのを楽しんでいた。このように市場で買ったおやつ風の食べ物は、ジャジャン・パサールと呼ばれる。パサールは市場を意味し、「市場でするジャジャン」という意味になる。ジャジャン・パサールは、精霊や祖霊へのお供えとしても使われるもので、ジャワでは人以外も存在もジャジャンが好ましい。

私が気に入っているジャジャン・パサールは、オンデ・オンデとナシ・リワットである。オンデ・オンデは、沖縄のサーター・アンダギーに似た揚げ菓子で、丸めた小麦粉の生地には白ゴマを付けて揚げたものである。ナシ・リワットはソロ市の名物料

理で、バナナの葉に包んで売られている。ココナツミルクで炊き込んだご飯に、ゆで卵、鶏肉

を少量載せ、上にハヤトウリの千切りを煮込んだ少し辛めのソースをかけて食べる。この二つは、ジャワを訪れる機会があると、必ず食べてきた。

ジャワの市場と買物の仕方

市場の店は早朝に開店し、昼前には閉店する。市場は女性の世界と言っても良いくらい、売り手も買い手も圧倒的に女性が多い。肉、魚、野菜などの食材に加え、惣菜、台所用品や日用品、植木、おもちゃ、服など様々なものが売られており、見ていて飽きない。

市場の中心となる建物は、トタン屋根で覆われた開放的な空間で、その中に小さなスタンド式の店が並び、通路脇にもござや台に商品を並べただけの店が出ている。この中心となる建物のまわりにも小さな商店が建ち並び、通りにも日傘の下に商品を並べた小さな店が並んでいる。



■(上段)祖霊へのお供え(右側の揚げ物はジャジャン・パサール)。(下段)ナシ・リワット。左のソースをかけて食べる。



■(上段右)市場内のスタンド式の店。(上段左)賑わう市場近くの通り。(下段右)市場で買い物をする女性たち。(下段左)秤でみかんを量る市場の女性。

量り売りが基本になっているため、多くの店に、秤と分銅のセットが置いてある。売り物に値札がついておらず、値段交渉ができるのも市場の特徴である。買手は多くの場合、最初に売り手に言われた値段で買うことはなく、少しでも安い値段になるように交渉する。買手は、買っても良いと思う額よりも低めの額を提示するところから交渉を始め、最初の売り手の提示額との間くらい金額で折り合うことを目指す。買手は、鶏肉は

この店、唐辛子はこの店と買物をする店を決めていることが多い。それは、行きつけの店だと値段交渉なしに一定の値段で買物ができるため、時にはおまけをしてもらえることもある。

スーパーマーケットでの買い物とジャジャン

市場では日々の食材を必要な分だけ買うのが基本だが、調理用油、砂糖、紅茶、コーヒー、粉ミルク等の食品や洗剤、シャンプーンなどは、スーパーマーケットでまとめて買う人が多い。スーパーマーケットで売られている肉、魚、野菜などの食材は市場に比べると値段が高いため、日常的に利用する人は少ない。それに対し、調理用油や洗剤等は大量仕入れのために安く、品質的にも安心であるということから、これらの品はスーパーマーケットで買うそうだが、スーパーマーケットの買い物は、月に一度が基本で「月の買物」と呼ばれている。インドネシアで給料日にあたる毎月一日後にこの買物をする人が多いため、毎月上旬の夕方、スーパーマーケットは買い物客で混雑する。また、インド

ネシアのスーパーマーケットでは、売り場に入る前にバッグを預けなくてはならない。財布等を取り出して預けると番号札を渡され、買い物が終わって帰るときにそれと引き換えにバッグを受け取る。スーパーマーケットは、クーラーが効いた店内に整然と商品が並べられており、日本の店の雰囲気とそれほど変わらない。その一方で、ドライヤーや炊飯器などの電化製品、整理棚、服、サンダル、タオルなどが並ぶ棚もあるのが特徴的で、スーパーマーケットとホームセンターを一緒にしたような品揃えになっている。その点は、食品に混じって様々なものが売られている市場の品揃えと似ている。また、店の入り口やレジ近くには、菓子、パン、飲み物、雑誌と新聞などのスタンド式の店が並んでいる。売られているものは、市場で売っているような伝統的な菓子類が多い。スーパーマーケットでも、ジャジャン・パサルが出来る場が、別に設けられているのである。



■改装された市場。2階建てでりっぱになった。

ジャジャン・パサルを楽しみにいつもの市場へ行ってみた。そこで目にしたのは、見慣れた古い市場の建物ではなく、コンクリート二階建てに改装した市場だった。市場の中心となる建物の入り口近くには、以前は日傘の下に商品を並べた店が並んでいたが、そこがバイクの駐輪場になっていた。改装に伴って売り場の様子も変わり、以前よりも配置がきちんと整備され、ひしめくように並んでいたスタンド式の店も数が減っていた。

市場の建物の中で肉を売る店はすべて二階に移動しており、衛生面も前よりは改善され、買い物しやすいように配慮されていることが分かった。しかし、整備が進むことで、以前よりもなじみにくい雰囲気になってしまった気がした。いつも買っていたオンデ・オンデの屋台をはじめ、顔なじみの店もいくつなくなってしまうていた。長年同じ場所ですべて売ってきた店が、どこへ移動したのか気にかかった。

屋台の種類と料理の内容

市場でのジャジャンと並んで、屋台でのジャジャンも日常的になされている。ジャワは、食べ物の屋台の数が多く、料理の種類も非常に多い。屋台料理の売り方は、移動しながら売るもの、道路脇などに店を出して売るものに大別される。移動式のもの、主に頭の上に籠を載せて歩く形、車輪のついた屋台を押して歩く形、または自転車や自動車を使って売

市場の変化

二〇〇九年に調査地を再訪した際も、



■移動式屋台カキ・リマ。

る形がある。頭の上に籠を載せる形のもの、焼鳥、揚げ物、ビーフン炒めなどを売っている。頭の上に支えになる輪を載せ、その上に料理の入った容器を載せて担ぐ形と、大型の平らなざるを頭に載せ、その上に料理の入った容器を載せて担ぐ形がある。

車輪のついた屋台を押し歩いて歩く形のもの、カキ・リマと呼ばれる。インドネシア語でカキは足、リマは五を意味する。インドネシア語は日本語と逆で、形容詞が名詞の後にくるため、これで「五本足」という意味になる。手押し式屋台には、前に二つ、後にひとつ車輪がついているため三本足、これに売り手の二本足を加えて五本足、これが語源だと言われている。

カキ・リマの屋台は、カットフルーツ、緑豆入りのココナツミルク、蒸し菓子、肉団子入りスープ麺、チキン麺、炒飯など様々な種類があり、コンロを積んでいて、注文するとその場で作ってくれるものもある。

自転車を使った形のもは、蒸しとうもろこし、パン、中華まん、アイスクリームなどを売っている。自動車を使ったものは、パンや菓子の販売が中心である。パン屋のロゴの入った車に商品を積んでおり、移動販売が基本だが、大通りの脇に駐車して店開きをすることもある。

屋台の音と時間

住宅街を移動販売する場合、当然のことながら家の中にいる買い手に屋台が通っていることに気づいてもらわなければならぬ。ジャワは熱帯で年間を通じて気温が高いため、日中は風が通るようにドアや窓を開け放している家が多い。そのため、日本の移動販売車のようにス



■(上段) 快活な鶏肉売りの女性。(下段) 屋台でコキス(菓子名)を焼く男性。

菓子売りなど、音で何の屋台であるかが分かる。聞きなれない音の屋台が通ったときには、呼び止めて何を売っているのかを確認することもある。

屋台で売りに来る料理は、朝、昼、夕、晩と時間によって内容が違っており、決まった屋台が大体同じ時間に売りにくる。しかし、あるときは待っていた屋台が休みで通らなかつたり、長期休業に入りたり、通る道を変えて、ある日ばかりと来なくなってしまうこともある。ヤシ砂糖をもち米に挟み込んで蒸し、ココナツ・フレークをかけたクプトウという菓子の屋台が私は特に気に入っていたが、これも食べたくて待っているときに限って来ない。

ピーカーを使って商品名を流さなくても、声や音が中まで聞こえやすい。屋台の売り手は、節をつけて売っている料理名を言う、小型の銅鑼や鈴など音が出るものを鳴らす、笛を吹く、テープで曲や声を流すなどするが、それぞれ味わいがある。毎朝、「ジャジャンはいかがですか？」と節をつけて言いながら、籠を担いで朝食用の揚げ物を売り歩いていた女性の声は、今でも印象に残っている。

屋台ごとに違いがあり、鈴をシャンシャンと鳴らして

歩くのは焼鳥売り、小型の銅鑼のようなものをポンポンと打つのは肉団子入りスープ麺売り、屋台に積んだ蒸し器に笛を取り付けて、蒸気でピーっという音を響かせるのは蒸し

朝は朝食にあわせて、パン、中華まん、豆粥などの軽食が中心である。昼頃はアイスクリーム、カットフルーツなどのすっきりした食べ物や、昼食用の揚げ物、肉団子入りスープ麺などである。夕方は、昼寝後の空腹時にあたるため、汁麺、蒸し菓子、蒸しとうもろこし等、ある程度お腹にたまるものが多い。夜は、夕飯となる、炒飯、焼きそば、焼鳥などのしつかりとした料理が中心となる。特に夕方



■(上段) チキン麺を売る通りの屋台。布に紅茶の広告入り。(下段) 街で一番おいしいと評判のナシ・リワットの屋台。



■(上)菓子類の屋台。どれを選ぶかいつも迷う。(左)晩に出店する小さな屋台。



や夜に来る屋台には、小さなコンロが積まれていて、その場で作ってくれるものが多い。出前と違って料理を待たされることもなく、値段も手ごろなので、屋台は日常的に手軽に利用されている。

日没後に出る通りの屋台

ジャワでは、移動せずに通りで食べ物売を屋台が、特に日没近くになるとあちこちに現れ、街の大通りには、多くの屋台が立ち並ぶ。ただ、近年では取り締まりが厳しくなり、決まった一角に出店することを求められるなど、以前ほど自

由に出店できない地域が広がってきている。

この形の屋台は、その場で食べることで出来るようになっており、料理を包んでもらって持ち帰ることも出来る。小型のベンチや椅子を置いたもの、靴を脱いでござの上に座って食べるようになってくるものもある。屋台には大きな布がかけられていて、中が見えにくくなっているものも多い。屋台の大きさは様々で、数人しか入れないような小規模のものから、二十人近く入れる大きなものまである。

屋台の布には、屋台の店名やメニューが書いてある。店名は、店主の名前、屋台を出している場所の地名、メインで売っている料理名などを組み合わせたものが多い。なかには名前がついていないかたり、「料理名・(味は) まあまあ」など個性的な名前がついているものもある。規模の大きい店は店員が複数いて、家族で経営しているものも珍しくない。

屋台の種類は、炒飯と焼きそば、鶏やあひるの揚げ物などの肉料理、海鮮料理、中華料理、パンケーキ、焼きとうもろこし、揚げバナナなど、食事が中心のもの、軽食と飲み物を中心としている店と多様である。カキ・リマと同様に、注文してからコンロで作ってくれるので、あたたかい出来立ての料理を味わえる。屋台は庶民的な雰囲気値段も安い、ジャワでは経済的に豊かな人々も利用している。屋台は経済的にも、年齢的にも多様

な人々が集まる場となる。

屋台には地域ごとに名物料理があるため、観光などで他の街にいった際、地元屋台で食事をすることを楽しむ人も多い。最近では、この屋台めぐりが旅番組に組み込まれてテレビ放送されて人気を集め、観光用に屋台料理を紹介した食べ歩き用のガイドブックやパンフレットも作られている。

集まりの場としての村の屋台

街の屋台や大通りに出ているものは、観光客も利用するなど開かれた雰囲気だが、村の屋台は住民を対象に営業しているものなので、少々雰囲気異なる。フィールドワークをしていた村では、三軒の屋台が晩になると出ている。屋台ごとに顔ぶれが決まっており、若者が集まる屋台、年長者が集まる屋台など、屋台ごとに特徴がある。街の屋台は家族連れや女性同士で食べに来ることもあるが、村の屋台は男性のものと意識されており、女性は屋台で売られている揚げ物などを買いに来て持ち帰り、その場では飲食をしないのが特徴である。

居酒屋の雰囲気と似ている気がするが、イスラム教徒が多数派のジャワでは、飲み物はアルコールでなく、紅茶、コーヒ、ホットミルク、しょうが湯などである。揚げ物をつまみ、飲み物を飲みながら

おしゃべりをする。村の屋台は情報交換をしたり、住民が交流をする場としての意味が大きい。

人と会う場としての市場・屋台

屋台と市場に共通しているのは、人と会う場としての重要性である。屋台では、客と店主が話をしたり、見知らぬ客同士が話を始めることも珍しくない。また、晩に出る村の屋台は、男性が近所の人と合って話をする場となっている。

市場では、顔なじみの店で話をしたり、買物客同士、あるいは近所の女性と話している場面を目にすることも珍しくない。冷蔵庫があっても市場での買物にわざわざ毎日のように行くのは、女性の人と合って話をするためだろうか。もしかしたら、スーパーマーケットでの買物に月に一度しか行かないのは、市場での買物に比べてつまらないからかもしれない。

(しおや・もも/総合文化学科教員*文化人類学)



■(上段)市場近くの野菜の店。(下段)お祭りの会場。飲み物中心の屋台。

言葉によるケア

クリス・ラング

●クリスマス

日本の友達を訪ねて来たニュージールランド出身の青年が、突然高熱に襲われ病院に行きました。熱の上がり下がりの激しさにDr.も首をかしげています。検査の結果、熱帯地方に多い病気だとわかりました。彼は日本到着前にあちこち回っており、熱帯の国にも行っていました。遠くの病院から薬を取り寄せるなど最善の治療が行われ、一週間ほどの入院で回復しました。時あたかもクリスマス。旅先での病気は気の毒です。小さなクリスマス飾りをお見舞いにあげました。熱でフウフウ言いながら彼は「NZから来た僕がまさか日本でこんなに暑いクリスマスを迎えるとはねえ……」と笑いました。

これは、医療通訳をされているYさんから寄せられたエピソードである。Yさんは、病院などで意思疎通をはかること

が難しい外国人を対象に医療通訳を行っておられ、「医療英語勉強会」の参加者のひとりである。

「医療英語勉強会」とは、島根に住む外国人を対象として医療通訳を提供するボランティアの育成・技能向上を目的とした事業である。しまね多文化共生ネットワークが開催しておられ、平成二十年に私の本学着任と合わせて声をかけていただいて以来、講師という形で参加させていただいている。しまね多文化共生ネットワークは、在住外国人の支援を目的として松江市を中心に活動している団体であり、お互いを理解し合い、尊重し合える友だちの輪を広げることを活動の目的として、各種教室や勉強会を通して情報交換を行っており、医療英語勉強会はそのひとつである。

月に一度の勉強会では、実際の医療場面を想定したテキストの日本語から英

語への翻訳学習を行うほか、具体的な診療場面をシミュレーションしながら通訳の練習をすることで医療用語を身につけるなど、実践的なメニューを取り入れている。テーマは幅広く、インフルエンザ、食物アレルギー、緑内障、不整脈など、専門的な内容にも対応できるようになっている。勉強会には、年齢、性別、職種を問わず参加者が集まり、毎回しっかりと予習してきたテキストを片手に、会場である私の研究室が狭く感じられるほど活発に意見交換が行われる。

この勉強会の参加者は、いろいろな興味深いエピソード、文化の違いを経験されており、今回いくつかご紹介させていただきたい。まず、冒頭でご紹介したYさんのエピソードである。

●謎の骨折

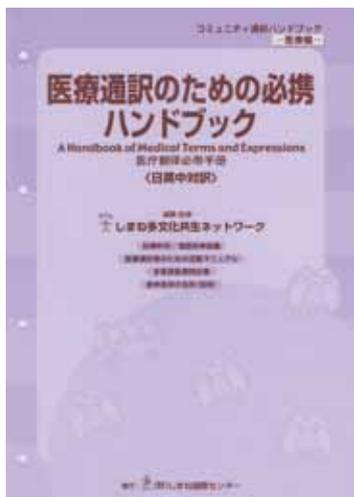
ある国のお嬢さんがふざけて空手のマネをして尻もちをつき、翌日からひどい足の痛みに苦しむようになりました。遂に歩けないほどの痛みになり、病院に行きました。レントゲンには骨折は見当りません。でもDr.曰く「画面には出ていませんがこの裏の骨にヒビが入っていると思います。不思議な話ですが、西洋人の方に特徴的な骨折なんですよ」。患部をピンポイントで見つけ処置をされました。しばらくは杖を使いましたが、やがて見事に全快。すると彼女はすぐまた空手のマネを始めました。やめなさいって！

●医者より詳しい

ある女性がのどの痛みで病院に行きました。彼女は日頃から運動にも食事にも気をつけているちよつとした健康オタクです。既往症の喘息が生活環境の変化で再発し気管支炎に発展した、という診断に納得するまでに一時間以上かかりました。炎症確認のためのレントゲン撮影も体に悪いとさんざんごね、既往症の喘息を示すレントゲン写真を見せられてもそんなはずはないと反論（実は本人が忘れていただけ）、治療で吸入をする際は含まれている薬品の一つが気に入らないとごねる……。処方される薬も漢方系に限るとDr.に指示。診断書が高いと受付でもひとこと。院外薬局で薬を購入する際も「これはもううけどこれは要らない……」。こういうケースに立ち会う通訳ってたいへんです。病気になるそうです。

●入院体験

ある国の女性が耳鼻咽喉科の病気で入院しました。でも病室が空いていないと



のことで彼女は産婦人科の六人部屋に。まだ若い彼女は「またとない経験だわ」と、せっせと周りの様子を日記に書いていました。

ご両親は「産婦人科病棟？」、「六人も一緒？」と驚いていたようですが、後日来日した時にぜひ当時の娘の主治医にお礼が言いたいと外来を訪ね、お礼の品を渡しました。お互い言葉はカタコトでしたが、その時のご両親とDr.の笑顔はとっても素敵でした。

次は、ある外国人女性の出産をサポートしたTさんのエピソードである。

深く印象に残っているのは、ある外国人女性の出産までの医療通訳です。半年くらいのお付き合いだったでしょう。出産は私自身も実際に体験したことなので、とても身近なこと、自分の過去の経験も思い出しながらのお仕事となりました。

とてもプライベートなことであり、また出産というのは精神的にも影響を与えやすいため、言いようのない不安や動揺を感じたりします。それで患者さんが何でもドクターに聞けるようになるには、私の意思疎通がまず大切と思い、検査と検査の待ち時間に努めていろいろ話をするようにしました。会話をすることで、ある程度の信頼を私においてもらい話しやすい雰囲気を作ることに努力しました。このことは必ずしも通訳とは関係あ

りませんが、通訳をよりスムーズに進める上で大切ではないかと思つたのです。

医療用語の通訳は最初のうち本当に大変でした。先生のおっしゃる単語がすぐには英語で出て来なくて、簡単な状況の説明で意味を伝えたり、辞書で調べながらだつたりと、今から思うと、ドクターにとっても患者さんにとっても、もどかしい時間だったのでと思います。そんな時も、全く嫌な顔もせず、じつと私の言葉を待っていてくれるという経験を重ねるにつれ「このままではいけない、もっと勉強しなきゃ！」という気持ちが強く湧いてきました。そんな気持ちが私を今まで導いてくれた気がします。

ある時、待合の場所ですつものように待っていたら、夫妻が現れ、「今日はセンターの方から通訳は違う人が行くかも

しれないと言われたので、不安に思っていたんだよ」と言つて、嬉しそうな表情をして近づいてきてくれました。その時、微力ながらも私のことを頼りにしてくれているのかと感じ、とても嬉しかったことを覚えていきます。

通訳は足さない、引かないの大原則に基づいた言葉の受け渡しですが、やはりそこに思いやる心があつてこそ、より行きとどいた通訳が出来るのではと感じた通訳でした。

次に、薬剤師としてのご経験を活かしながら通訳をされているAさんが経験された、日本と西洋の薬に対する感覚の違いについてご紹介する。

日本ではおなじみのシップ薬、粉薬、坐薬ですが、西洋では見たことも使ったこともないため、使い方も何の薬かも分からない人があります。患者さんが日本人の方でない場合は、使い方が分かるかどうか確認し、分からない人には、丁寧に説明し、必要があれば錠剤に変更をします。

痛み止めや熱を下げる薬としてよく使われる薬のひとつに「アセトアミノフェン」という薬があります。日本人に対しては、一回四〇〇ミリグラムの量で効果がありますが、西洋の方では一回五〇〇〜六〇〇ミリグラム使わないと効果が現れにくいことがあり、量に注意しなければ薬を使用しても効かないという

ことになってしまふ場合があります。

日本ではお風呂と言えは仕事が終わる家庭に戻って寝る前に一回入るのが普通と考えられています。ブラジルなどでは朝起きた時と夕方二回入るのが習慣と聞いています。軟膏、貼付薬(例えば、喘息の薬、咳止めとしても使われる薬)など医師の指示が「お風呂上がり」に使用」となっている場合、日本人とは違った使い方をされる可能性があります。

マスクの着用についても、日本では咳がでる時など着用するのが当たり前と考えられています。西洋では、マスクを着用する習慣がないと聞いています。

何の薬か説明する場合、日本語を辞書でひいて難しい医学用語を英語で通訳しても、相手はその単語を知らないこともあり、「分かりやすい言葉」になおして通訳することが大切です(例えば、「去痰剤」ではなく「痰を切る薬」と言い換えて通訳します)。

最後に、医学部に在籍し、デンマークに一月留学経験のあるUさんのエピソードである。

デンマークでは診察の最初に患者さんと握手をするのが習慣なのですが、当初はなかなか不思議な感じでした。しかし一カ月たち、日本へ戻る頃には自分から握手を求めらるくらいになっていて、日本へ戻ってから患者さんに挨拶(次頁最下段へ続く)





留学生事情

短大卒業生@セントラル・ワシントン大学

小玉容子

島根県立大学短期大学部松江キャンパスは、前身の島根県立女子短期大学時代から継続して二十年以上にわたりアメリカ、ワシントン州のエレンズバーグにあるセントラル・ワシントン大学（通称・セントラル）と協力協定を結んでいる。エレンズバーグはシアトルから車で二時間ほど内陸に入ったところにあり、大学と干し草と牛の町だ。松江キャンパスは、毎年夏休みに「サマー・プログラム」と呼ばれる短期の「海外語学研修」をセントラル・ワシントン大学で実施している。また、例年数名の留学希望者がいて、これまで四十名を超える卒業生がセントラルに留学している。この中には、毎年



一名、一年間学費免除奨学生が含まれる。

留学には大きく分けて、一年間程度の語学留学と大学に学部編入し卒業を目指す留学の二タイプがある。今回は学部編入した短大卒業生に、現在の生活についていろいろ情報を提供してもらった。彼女たちは島根県立女子短期大学最後の卒業生で、文教科英文専攻を平成二十年三月に卒業し、卒業式の一週間後には三人そろって（実際は四人だったが、一人は他大学へ編入したので今回は登場していない）アメリカへ渡り、留学生生活をスタートさせた、藤井嵩子さん、高尾亜友美さん、福島翔子さんである。

専攻と年間カレンダー

藤井さんは「コミュニケーション」を専攻し、副専攻は「中国語」で、来年三月の卒業を予定している。高尾さんは、「フィルム&ビデオ」の批評コースを専攻し、今年八月に卒業をして帰国した。福島さんは「社会学」専攻で、副専攻は「ビジネス」。福島さんも来年三月の卒業を予定している。お気付きのように、八月卒業あり、三月卒業ありだ。

セントラルの年間カレンダーを簡単に紹介すると、秋学期（九月～十二月）、

（前頁より続く）

する時は「実習生のUです」と言ってしまう（苦笑）。また、デンマークにいた頃は、くしゃみをするとその部屋にいる全員からbless youと言われ、私も誰かがくしゃみをするよbless youと言っていたので、日本に戻ってからもしばらくは、くしゃみをするよbless youが来るかと身構えたり、誰かがくしゃみするよbless youと喉まで出かかっていました。

このように、異文化に接するということは、単に言葉のやり取りだけではなく、その文化と個人を理解するということなのである。その人の背景にある文化、またその文化の影響を受けて形成された人格を思いやるのが、コミュニケーションの第一歩であろう。

人は健康な時ばかりではなく、病院にからなければいけない時が突然やってくる。そんな時は、誰でも心細く不安に思うものだが、異国に住み、言葉の壁がある外国人にとっては、その不安はさらに大きなものになる。そんな時、このような医療通訳ボランティアの方が、通訳作業以上に親身になって寄り添ってくださることは、どんなに心強いことであろうか。このような取り組みが全国、世界に広がり、まさに「多文化共生」の輪が広がることを期待している。

（Krisz Lange / 総合文化学科教員*英語教育）



冬学期（一月～三月）、春学期（三月～六月）の三学期と、夏学期（八～十週のコースが二回）というようになっている。どの学期からでも履修を始められるし、卒業単位を取得したところで修了となり、卒業を迎える。

一般的には秋学期に入学して、卒業は春学期だ。秋学期がスタートする時、入学式にあたる新生オリエンテーションがあり、大学での生活や履修制度などについて説明を受ける。春学期が終わると

卒業式があり、秋・冬学期で修了した学生や、夏学期で修了予定の学生もこの卒業式に参加できる。八月卒業の高尾さんは、六月にガウンとキャップを身につけて、感動の卒業式に参加した。

卒業に必要な単位は一八〇単位で、一般教養科目、主専攻専門科目、副専攻専門科目の合計単位である（主専攻により、副専攻が必要な場合と不要な場合がある）。一科目五〇分授業が週五回で五

単位という数え方なので、卒業単位数だけを比べると日本の四年制大学（通常一二五単位）よりかなり多いように感じるだろう。短大卒業生は、編入学時に短大での取得単位を移行してもらおうが、何単位が認められるかは個人個人で異なる。

たとえば高尾さんの場合は、平成二十年春学期・夏学期はE.S.Lと呼ばれる大学の付属英語学校で英語を勉強した。学部編入は平成二十年の秋学期からで、単位換算による移行単位が一〇〇単位ほどあり、平成二十二年の夏学期まで、学部在学二年間で卒業に必要な単位を取得したことになる。専攻により、また短大



の取得単位をどの程度移行してもらえるかにより、卒業までの期間は異なる。

専攻で何をどのように学ぶか

三人にそれぞれの専攻でどのような勉強をしているのかを紹介してもらおう。

藤井 個人対個人、個人対多数、女対男、国家対国家など、様々なレベルでのコミュニケーションにおける特徴や理論などを学び、あとはディスカッション、プレゼンテーション、レポート提出などをガンガン要求されます。国レベルでの文化に基づいたコミュニケーション能力や特徴を比較した時に、日本人としての意見をいろいろと聞かれました。他の

国の学生と意見交換や情報交換をすることで、新しいことをたくさん学びました。初めは「参加型授業」に圧倒されっぱなしだったけど、しばらくして慣れてきて、授業中に頭をフル回転させること、自分の意見を持つことは大切だと実感しました。

高尾 ハリウッドの歴史、映画のジャンル、映画批評理論等の基本的事柄を学んだり、映画の撮影技術、演出の仕方などを理論面から勉強したりしました。映画を通してアメリカと日本、または他の国との文化の違いや、映画に対する見方の違いなどを学びました。また、黒澤明監督など、日本を代表する映画

監督の映画も初めて見て、それまではハリウッド映画中心だったが、日本映画もたくさん見るようになりました。クラスでただ一人のアジア人だったり、英語でプレゼンテーションを行ったりすることも多く、人見知り克服されました。

福島 社会問題を勉強したり、それらを理解するための統計学やデータ分析を勉強したりしています。ロッキード事件が課題として取り上げられた時は、様々なリーディング課題を読み、表に出なかった細かいことまで知ることができました。最初は英語の勉強に必死でしたが、英語が分かるようになってからはいろいろな科目に興味を持ちました。社会学や

ビジネスは、日本にいた頃は興味なかったのですが、英語で勉強すると一味違う面白みがあります。社会学で、社会のしくみや自分が今生活している社会について知ること、今まで見えなかった世界が漠然とですが見えてきた気がします。

授業アラカルト

セントラルでは、専攻の種類も授業の種類も半端じゃないほど多い。留学して二年目を迎えている栄養学専攻の総合文化学科卒業生は、「グローバル・ワイン・スタディーズ」という科目群を履修していて、ソムリエの資格も取得する予定だ。しかし、もちろん二十一歳以上でないと履修できない。藤井さんと高尾さんは体育で「キックボクシング」を履修した。他にも「フリスビー」「ゴルフ」「エアロビ」「ボーリング」「ジョギング」などなど、体育の授業だけをとっても選択肢が非常に多い。

どんな人材を採用したら会社にとって有利かなどを学ぶ「ヒューマンリソース（人材学）」の授業もおもしろそうだし、キャンパス内で穴を掘っている「考古学」も（何が出てくるかわからないけれど）目と関心を引いたとのこと。しかし全ての授業は時間とお金に結びついているので、皆、卒業に向けて専門科目に集中している。ちなみに三人とも短大での専攻は英語だった。セントラルでの専攻は、編入後に一般教養で不足している単位を取りつつ、目当ての専攻や他の専攻の勉



強内容を調べてから最終決定をした。アメリカ人の学生も入学する時に専攻が決まっている人ばかりではなく、大学での勉強を始めて、徐々に専攻を絞っていく学生も多い。

授業料および経費について

先ほど「時間とお金」ということを言ったが、アメリカではどの大学でも、授業料や寮費、生活費などが年々値上がりしている。州立大学のセントラルだが、授業料は各学期およそ五六〇〇ドル。諸経費込みの金額だが、近年は上がり幅も大

きくなっている。しかし一方、ファイナンシャル・エイドやチューイション・ウェイバーと呼ばれる授業料減免制度も利用できる。松江キャンパスはセントラルとの長い交流の中で、減免制度も短大卒業生枠を設けてもらっているのでも、大いに利用してもらいたい。

一学期の授業料。これは十八単位までの授業料で、それを超えると一単位につき約五〇〇ドルを追加して納めなければいけない。藤井さんも福島さんもこのような追加の授業料を払っても卒業が延びるよりは良いということで、平成二十二年の秋学期からは十八単位を超える履修をして、少しでも早い卒業を目指すことにしている。オンラインで受けられる授業もあるが、これもまた一科目につき四〇ドル追加になるそうだ。

オンラインコースは、パソコンでインターネットを利用し自分の好きな時間に受けられる通信講座だ。時間が自由なだけでなく、どこにいても受講できるというメリットがある。先生の講義を

iTunesで聴き、資料は授業のサイトで入手し、チャット機能を利用してのディスカッションも時間指定で参加する。福島さんはこの夏、日本で就職活動しながらオンラインで社会学の専門科目を二科目履修した。もちろん、エレンズバーグにいて普通の授業とオンラインクラスを組み合わせて受講することもできる。

生活&アルバイトのこと

勉強のことばかりを話題にしてきたが、お金続きでもうひとつ。留学生でも学内のカフェテリアや図書館などでアルバイトをしている人は結構多く、時給は八・五〇ドルだ。週二十時間以内という制限はあるが、藤井さんと高尾さんは、アルバイトでアパート代くらいは稼いできたという。留学して最初の学期は、皆寮に入って学食を利用しての生活だったが、寮費が高いのと、食事が合わないこともあって、すぐにアパートに移った。アパートでは自炊ができ、ご飯を炊いて、みそ汁を作って、日本食中心の食生活ができるので体調も安定する。

ESLで英語の勉強をしていたころは、時間の余裕もあり、金曜日はパーティ!!土曜日もパーティ!!という時もあったが、学部に入ると忙しくてそんな余裕はなくなる。金曜日も勉強、土曜日・日曜日にはバイトも入れたりして、パーティどころではなく、エナジー・ドリンク（ドリンク剤）を飲んで頑張ったそうだ。そして、日本人同士で話す時は、卒



業単位の話とか、就職活動の話とかが中心になり、パーティは過去のものに……、ということ、この三人に代表されるように、日本人留学生は大体真面目で勤勉な留学生生活を送っている。

楽しみは長期休暇中の国内旅行で、ラスベガス、ロサンゼルス、カナダ、ニューヨークなど、格安で行けるので今のうちに、という思いで出かける留学生が多い。エレンズバーグに住んでいると、シアトルは近いので（車で二時間くらいは十分かかるが、あの広いアメリカでの移動時間としては「近い」距離）買い物だけで

なく、イチローの試合もシーズン中何回か見に行くという。その他、感謝祭、クリスマス、ニューイヤーなどの行事も、パーティや友達の家を招待されたりして楽しんだそうだ。

卒業後に向けて

留学生にとって、卒業後の就職は心配ごとの一つだ。東海岸のボストンで毎秋開催されるキャリア・フォーラム(Career Forum, Net主催)——インターネットでこの言葉を検索すると情報が載っている)に、昨秋、三人は出席し、就職活動をスタートさせた。ボストンではバイリンガル人材を求め日・米の企業が〇〇社以上ブースを出し、企業説明や面接などを行う。同様の企業説明会がロサンゼルスや東京でも開催され、留学生の就職活動の場となっている。東京でのキャリア・フォーラムに参加するために、夏休みに日本に一時帰国する在学中の留学生も多い。このフォーラムで、どんな企業が来るかをウェブサイトでチェックして、履歴書を渡して歩くことが就職活動の第一歩だ。

今年の夏、日本で就職活動をした福島さんの場合、最終的には自宅近くの会社から内定を得て、本人はもとより、家の方たちが大変喜ばれた。彼女は、英語、韓国語、中国語の外国語力を大いにアピールしたという。社会学専攻の福島さんだが、中国語と韓国語もセントラルで二学期間受講し、ルームメイトが中国

人、友達は韓国人という環境で生活したので、短期間で日常会話ができるほどの力がついたそうだ。

インターネット時代になったおかげで、どこにいても企業の採用情報が手に入るようになった。企業も留学経験者の採用に積極的になってはいるが、留学生の就職活動は簡単ではない。履歴書を書くこと一つとっても、日本の大学生は大学での就活支援の中で指導を受けるだろうが、福島さんの場合、三十社近くの会社の採用試験を受けて、一回一回履歴書をより良いものにしていったという。面接や自己PRなども数をこなしながら自分で工夫をしてみたそうだ。「語学力も上には上がっている」ということも想像できる。就職活動ができる時期が限られていたり、その他にも不利な点はあるが、就職活動中の高尾さん、藤井さんは、留学で学んだことを自信を持ってアピールし、頑張っしてほしい。

アメリカ留学をして

最後に藤井さん、高尾さん、福島さんの声を伝える。

藤井 卒業の見通しがつきラストスパイトをかけるころですが、やっぱり言葉の壁は厚く高い。自分の言いたいことが伝わらないことにイライラしたり、そんな自分自身に嫌気がさすこともあります。しかし、自分自身でその状況を乗り越えていく力や精神力を養うことができ、本当に留学をして良かったと思いま

す。留学生生活を支えてくれている両親や家族、友達の存在に、改めて心から感謝しています。

高尾 アメリカでの勉強を終えて、本当にアメリカに行って良かったと思います。アメリカかぶれだった自分が、日本人の几帳面さだとかまじめさを改めて知り、日本の良さに気付きました。親元を離れての生活で、生活力も身についたと思います。さまざまな国の人たちと出会い、また日本人の中でも、日本にいたら出会えなかった人たちと出会うことができ、アメリカ留学から得たものは本当にたくさんあります。

福島 アメリカに留学して一番思うことは、自分の視野や世界が広がったことです。二十年間地元を離れたことがありませんでした。アメリカでの生活では、困難や失敗などもありましたが、自分に喝を入れ、時には留学生同士で励ましあい、目標の卒業に向かって頑張っています。今、改めて自分の育ってきた環境に感謝しています。家族の支えなくして留学はなかったし、地元に戻ってきた時に「おかえり」と迎えてくれる友達がいてくれるので、自分の原点を見失うことなく、今まで頑張ることができました。

藤井さん、高尾さん、福島さんの今後の活躍を祈っている。
(こだま・ようこ／総合文化学科教員*アメリカ文学)